

全学教育科目に係る授業アンケートにおける エクセレント・ティーチャーズ (令和7年度)

教育イノベーション機構（旧：高等教育推進機構）では、平成24年度から、全学教育科目に係る授業アンケート結果において、総合評点が上位となった専任教員の中から、次項の選定基準に基づき、「全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャー」を選定し、責任教員氏名、担当教員氏名、所属部局名、職名、担当授業科目名、総合評点をホームページで公表することとしている。

また、エクセレント・ティーチャーズのうち、各授業科目区分の最上位者から、当該授業科目の目的・内容、実効上の取組・工夫等について報告を受け、その内容を紹介している。

教員から報告された授業への取組・工夫等については、学生へのフィードバックを目的とするとともに、教員のFD及び教員相互の授業参照資料として活用するため、公表する。

なお、平成23年度まで評価室が実施してきた授業アンケート結果の公表に至る検討の経緯や公表方法に関する考え方等については、平成15年度年次報告書（第1部第2章『学生による「授業アンケート」について』）及び同別冊「学生による授業アンケート結果」（PDF）を参照されたい。

また、授業アンケートは学生の視点からの評価であり、この指標のみが授業の質や教員の教育能力を示すものではないことを付言しておく。

全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーの選定基準

1. 対象者

対象年度に開講した全学教育科目において、学生による授業アンケートを実施した授業科目を担当する
 本学の教員※とする。

ただし、アンケート提出者が9名以下の授業科目を担当する者は除く。

※シラバスに掲載されている責任教員・担当教員。ただし非常勤講師は除く。

2. 選定方法

学生による授業アンケート結果において、文系・理系区分及び授業科目区分ごとに総合評価の値が上位
 の者から、原則、別表①の選出数に基づき全学教育科目におけるエクセレント・ティーチャーズとして選
 定する。ただし、総合評点（主要設問の評定値の平均）の値が4.00未満の者は除く。

なお、文系・理系区分は、責任教員の所属部局により別表②の「文系・理系区分」に基づき区分するこ
 ととし、授業科目区分は、国立大学法人北海道大学全学教育科目規程（平成7年4月1日海大達第2号）
 第2条に規定する科目により区分することとする。

【別表①：選出数】

		一般教育演習	総合科目	主題別科目	共通科目	外国語科目	外国語演習	基礎科目	日本語科目
文系	15	2	1	4	1	3	3	1	
理系	15	4	1	1	1	2		6	

【別表②：文系・理系区分】

＜文系部局＞

文学研究院 教育学研究院 法学研究科 経済学研究院 メディア・コミュニケーション研究院 公共政策学連携研究部 スラブ・ユーラシア研究センター	観光学高等研究センター アイヌ・先住民研究センター 社会科学実験研究センター 大学文書館 埋蔵文化財調査センター 学生相談総合センター 国際連携研究教育	産学・地域協働推進機構 高等教育推進機構 大学院教育推進機構 総合 IR 本部 安全衛生本部
--	--	--

＜理系部局＞

理学研究院 医学研究院 保健科学研究院 歯学研究院 薬学研究院 工学研究院 農学研究院 獣医学研究院 水産科学研究院 情報科学研究院 地球環境科学研究院	先端生命科学研究院 低温科学研究所 電子科学研究所 遺伝子病制御研究所 触媒科学研究所 人獣共通感染症国際共同研究所 情報基盤センター アイソトープ総合センター 量子集積エレクトロニクス研究センター 北方生物圏フィールド科学センター 環境健康科学研究教育センター	北極域研究センター 広域複合災害研究センター One Health リサーチセンター 数理・データサイエンス教育研究センター 総合博物館 保健センター 総合イノベーション創発機構 サステイナビリティ推進機構 北海道大学病院
--	---	---

3. その他

- （1）上記2のエクセレント・ティーチャーズのうち、各授業科目区分の最上位者から、当該授業科目
 の目的・内容、実行上の取組・工夫等についての報告を得て紹介する。ただし、過去3年間に紹介
 したエクセレント・ティーチャーは除く。
- （2）一人の教員が複数の授業科目区分で最上位となった場合は、全ての授業科目について報告を得て
 紹介する。ただし、対象者の希望により、報告・紹介する授業科目をいずれか一つのみとすること
 ができる。
- （3）上記（1）、（2）のただし書きに該当する場合、及び退職等で報告を得られない場合は、次点の
 エクセレント・ティーチャーから報告を得て紹介する。
- （4）上記2のエクセレント・ティーチャーズのうち、各授業科目区分の最上位者を「ベスト・エクセ
 レント・ティーチャー」とし、教育イノベーション機構長より表彰する。

全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーズ(令和7年度)

区分内 順位	文系 理系	授業科目区分	総合 評点	※責任教員 所属部局名	※責任教員 職名	責任教員	担当教員(担当教員所属部局)	期	授業 形態	必修 選択	授業科目名	講義題目名	提出 者数	備考
★	1	理系 一般教育演習	4.86	農学研究院	教授	小関 成樹		前	演習	選択	一般教育演習(7 レクチャーボード)	食べ物が食卓に届くまで	14	
	2	理系 一般教育演習	4.82	北方生物圏フィール ド科学センター	教授	岸田 治	中村 健吾(広報・社会連携本部)	後	演習	選択	一般教育演習(7 レクチャーボード)	南紀熊野の自然と人々のくらし・初春編	15	
	3	理系 一般教育演習	4.78	北方生物圏フィール ド科学センター	准教授	河合 正人		前	演習	選択	一般教育演習(7 レクチャーボード)	牧場のくらしと自然・夏季編	12	2022ベスト 2022執筆
	4	理系 一般教育演習	4.76	北方生物圏フィール ド科学センター	教授	岸田 治		前	演習	選択	一般教育演習(7 レクチャーボード)	南紀熊野の自然と人々のくらし・夏期編	19	
	4	理系 一般教育演習	4.76	北方生物圏フィール ド科学センター	教授	岸田 治		後	演習	選択	一般教育演習(7 レクチャーボード)	南紀熊野の里山と林業	10	
	4	文系 一般教育演習	4.76	高等教育推進機構	准教授	杜 長俊	鄭 惠先(高等教育推進機構)	前	演習	選択	一般教育演習(7 レクチャーボード)	北大発の多文化共生にかかわろうー外国人とのコミュニケーション	20	2023ベスト 2023執筆
	7	文系 一般教育演習	4.70	大学院教育推進機構	教授	種村 剛		前	演習	選択	一般教育演習(7 レクチャーボード)	演劇創作を通じて考えるSDGs	15	
★	1	理系 総合科目	4.49	情報基盤センター	教授	布施 泉	平林 義治(情報基盤センター) 山本 裕一(情報基盤センター)	後	講義	選択	人間と文化	誰でもプログラミング	18	
	2	文系 総合科目	4.48	高等教育推進機構	教授	亀野 淳	川上 あき(高等教育推進機構)	後	講義	選択	特別講義	大学と社会ー先輩からの熱いメッセージー冬	42	2023、2024ベスト
★	1	文系 主題別科目	4.83	メディア・コミュニ ケーション研究院	教授	中川 理		前	講義	選択	社会の認識	コンサルティング入門Ⅰ 論理思考の身につけ方	20	2022、2024ベスト 2024執筆
★	1	文系 主題別科目	4.83	メディア・コミュニ ケーション研究院	教授	中川 理		後	講義	選択	社会の認識	コンサルティング入門Ⅱ 発想転換の方法論	15	
	3	文系 主題別科目	4.76	文学研究院	教授	近藤 浩之		前	講義	選択	思索と言語	中国哲学と論理学	10	
	4	文系 主題別科目	4.74	大学院教育推進機構	講師	古澤 正三	池田 亀子(大学院教育推進機構) 大内田 美沙紀(大学院教育推進機構) 沼田 瑠二朗(大学院教育推進機構) 本平 航大(大学院教育推進機構)	前	講義	選択	科学・技術の世界	北海道大学の「今」を知る	12	
	5	理系 主題別科目	4.50	医学研究院	准教授	横田 勲		前	講義	選択	社会の認識	医学概論・医学統計学・医学史概論Ⅱ(医学統計学・医学史概論)(夏ターム)	30	
★	1	文系 共通科目	4.34	教育学研究院	教授	阿部 匡樹	嶋田 嘉寛(教育学研究院)	後	講義	選択	体育学B	講義	63	
	2	理系 共通科目	4.27	情報基盤センター	教授	布施 泉	平林 義治(情報基盤センター)	後	講義	選択	情報学Ⅱ	Pythonプログラミング	23	
★	1	文系 外国語科目	4.70	メディア・コミュニ ケーション研究院	教授	GAYMAN JEFFRY JOSEPH		前	講義	必修	英語Ⅰ		29	2023ベスト 2022執筆
	2	文系 外国語科目	4.66	メディア・コミュニ ケーション研究院	教授	金 ソンミン		前	講義	必修	韓国語Ⅰ		40	
	3	文系 外国語科目	4.64	メディア・コミュニ ケーション研究院	教授	金 ソンミン		後	講義	必修	韓国語Ⅱ		41	
★	1	文系 外国語演習	4.75	メディア・コミュニ ケーション研究院	准教授	JADREY ALEXIS CLAUDE		後	演習	選択	フランス語演習	C1:LevelⅠ	13	
	2	理系 外国語演習	4.72	先端生命科学研究院	教授	LI XIANG		後	演習	選択	英語演習	中級・生命科学の英語演習	12	
	3	文系 外国語演習	4.71	文学研究院	教授	佐野 勝彦		後	演習	選択	英語演習	中級・英語で学ぶ論理学	18	2024ベスト 2024執筆
	4	文系 外国語演習	4.68	メディア・コミュニ ケーション研究院	教授	ロブ ナイジェル フォッドフリー イアン		後	演習	必修	英語技能別演習	発信型	21	2023執筆
	5	理系 外国語演習	4.41	理学研究院	教授	松王 政浩		前	演習	選択	英語演習	中級・科学ジャーナリズムの英語	22	
★	1	文系 基礎科目	4.62	文学研究院	教授	藤田 健		前	講義	必修	人文・社会科学の基礎	人文科学入門Ⅲ	24	
	2	理系 基礎科目	4.55	工学研究院	准教授	久保田 浩司		後	講義	必修	化学Ⅱ		47	2022、2023ベスト
	3	理系 基礎科目	4.47	理学研究院	准教授	大内 元気		後	講義	必修	微分積分学Ⅱ		15	
	3	理系 基礎科目	4.47	理学研究院	講師	丸田 悟朗		後	講義	必修	化学Ⅱ		35	
	5	理系 基礎科目	4.43	獣医学研究院	教授	安井 博宣		後	講義	必修	生物学Ⅱ		28	
	6	理系 基礎科目	4.41	工学研究院	教授	中島 一紀		後	講義	必修	化学Ⅱ		15	
	6	理系 基礎科目	4.41	地球環境科学研究院	准教授	河谷 芳雄		後	講義	必修	地球惑星科学Ⅱ		121	

★ :ベスト・エクセレント・ティーチャー

☐ :「授業内容・工夫等」執筆依頼者

※「所属部局名」「職名」は、令和7年度授業実施時点のものを記載

◎授業科目区分毎の授業アンケート実施者数(延べ)

一般教育演習	116 名
総合科目	44 名
主題別科目	105 名
共通科目	37 名
外国語科目	155 名
外国語演習	200 名
基礎科目	191 名
日本語に関する科目	16 名
計	864 名

一般教育演習(フレッシュマンセミナー)

「食べ物が食卓に届くまで」

農学研究院 小関 成樹

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

朝、昼、晩、私たちの食卓には毎日いろいろな食べ物が並びます。それらの食べ物のほとんどすべては、生き物(農産物、畜産物、水産物)から作られています。この授業では、農畜産物が収穫されてから食卓に届くまでの過程(ポストハーベストプロセス)と農畜産物や食品の品質や美味しさ、そして安全性について理解を深めることを目標とします。

到達目標 Course Goals

食べ物が食卓に届くまでのポストハーベストプロセスの複雑さを理解するとともに、そのポストハーベストプロセスを支えるためにいろいろな技術が応用され、安全で美味しい食べ物を食卓に届けるために現在もなお先端技術の開発や研究が進んでいることを学びます。

授業計画 Course Schedule

授業では、米や青果物、牛乳などの農畜産物が収穫された後、食卓に並ぶまでの加工貯蔵輸送プロセスや農畜産物や食品の品質(食味)評価法、殺菌法(微生物の制御法)などについて、最先端の研究や技術開発も含めて学びます。

授業では、以下のように1回に一つのテーマを取り上げます。授業の中の1回分は、生物環境工学科食品加工工学研究室を訪問し、研究室の大学院生や4年生から現在進行中のいろいろな研究について説明を聞きます。皆さんで小グループ(毎回くじ引きで変えます)を作ってもらい、その日のテーマについて、まず調べてもらいます。調べた結果を、それぞれ発表しあって皆さんの共通の理解度を高めます。最後に教員から最新の研究に関することや、その他関連する追加情報を提供します。皆さんが日頃食べている食品について正しく理解をすることを目的として、より豊かな食生活を楽しめるようになってもらうことを狙いとしています。

また、数人のグループを作り食べ物に関する一つのテーマを選び、そのテーマに関して自分たちで文献や資料を調査研究し、そのテーマについて授業の中でパワーポイントを使って自分たちで発表します。

- 1 ガイダンス
- 2 安全と安心は違うよ
- 3 遺伝子組換え作物、ゲノム編集食品って、どうなの？
- 4 牛はどうやって肉になるのか？
- 5 食品ロスを考える
- 6 野菜や果物はどやうやって畑からくるのか？
- 7 研究室探訪(食品加工工学研究室の人達)
- 8 缶詰・レトルト食品はどやうやって作られる？
- 9 牛乳はスゴイ！
- 10 食品添加物って、実際のとこどうなの？

11 乾燥食品はどうやって作られるのか？

12 グループ発表 1

13 グループ発表 2

14 グループ発表 3

15 グループ発表 4

成績評価の基準と方法 Grading System

毎回の授業の最後に、小テストを行い、小レポート(授業内容に関する感想意見や疑問質問)を提出します。小テストの解答(50 点満点)と小レポートの内容(20 点満点)、自分たちの研究発表(30 点満点)により成績評価をします。学期末試験は行いません。また、授業に出席することが大切です。

95 点以上を A+、90 点以上を A、85 点以上を A-、80 点以上を B+、75 点以上を B、70 点以上を B-、65 点以上を C+、60 以上を C とする。

昨年の成績は、A+が 4%、A が 43%、A-が 30%、B+が 9%、B が 4%、B-が 4%、C+が 4%でした。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

本授業は、大学進学と同時に一人暮らしを始める学生が多いことを踏まえ、「食べる」という行為に主体的な関心を持ち、賢い消費者になってもらうことを目的とする。世の中に溢れる誤情報や思い込みを見直し、正しく理解した上で、恐れるべきところは適切に恐れ、自らの判断で選択していく力を養うことで、今後の食生活を豊かにしてもらいたいと考えている。

授業ではまず、食の基本である「安全性」について掘り下げ、その中で「安全」と「安心」の違いを理解することを出発点とする。続いて、日本がいかに豊かな食環境にあるかを多角的に学び、現代の大量生産される食品がどれほどの知恵と工夫に支えられているかを理解してもらう。とりわけ、加工食品の製造技術の発展や食品添加物の必要性について理解を深めることに重点を置いている。最終盤の 4 回では、5～6 名からなる 4 グループを編成し、各グループが食にまつわるテーマを設定して調査・考察した内容を発表することで、より深い学びへとつなげている。

② 授業実施上の取組・工夫

一般的な講義形式は採らず、毎回コンピュータ抽選で編成し直す小グループの中で、その日のテーマについて意見交換をしてもらう形式を基本としている。その際、最も重視しているのは、インターネットや AI に頼らず、その瞬間の自分自身の知識と考えだけで自由に議論させることである。現代の学生は、疑問が生じるとすぐにネットや AI で調べて分かった気になり、しかもその情報があたかも唯一絶対の正解であるかのように錯覚しがちである。そうではなく、一人ひとりの人間が同じテーマについて異なる考えを持っていることを実感してもらうため、まずは素の状態で議論させることを徹底している。グループ内でもグループ間でも意見の相違が生まれ、学生は物の見方の多様性を肌で感じ取る機会となっている。また、毎回異なるメンバーでグループを組ませることで、普段は交わることのない多様なバックグラウンドを持つ学生同士を半ば強制的に交流させ、新たな人間関係の構築も促している。授業観そのものを変えることを目指し、教員が話す時間を極力減らし、学生同士が話し

合う時間を最大限確保することを重視している。

なお、最近の試みとして、グループ発表の資料作成にはAIの活用を推奨している。重視しているのは資料の出来栄ではなく、その資料を用いてどれだけ説得力を持って伝えられたかという点であり、これを教員だけでなく聴講する学生にも評価してもらっている。AIが発達する時代だからこそ、自分自身の言葉で伝える力がいつそう重要になるとの考えから、このような発表の場を設けている。

③ その他

授業全体を通じて、履修生のみが閲覧・編集できる授業ページをCosense（旧Scrapbox）上に作成し、意見交換や資料配布、コメントの共有などに活用している。最大の利点は、授業時間中に履修者全員が同じページへ同時に書き込める点である。質問やコメントが次々と書き込まれる様子を見ながら、学生は他者の意見に触れると同時に、自分自身の考えの独自性にも気づいていく。授業改善に関心のある方には、ぜひ一度お試しくださいツールである。

■学生の自由意見（良かったと思う点等）

- ・毎回違うテーマで食について知らないことを知られて良かった。
- ・生活を営む上で大切な知識を沢山学ぶことができた。
- ・意見交流などが多かった点や食について新たに学べたことがたくさんあった点が良かった。

人間と文化

「誰でもプログラミング」

情報基盤センター 布施 泉
平林 義治
山本 裕一

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

情報社会における学問の基礎力として、プログラミングを通して課題を解決するための考え方について学ぶ。

到達目標 Course Goals

初心者を前提に、プログラミングの基本から始め、何か関心のある応用課題に挑戦し解決する。その内容は、データの統計的处理、シミュレーション、アニメーション、音の演奏、迷路の作成、ゲーム、Web 表現等、先生と相談して決める。

プログラミングの基礎としての到達目標は以下の通りである。

- 1) 判断分岐、繰り返し等の処理を適切に行えるようになる
- 2) 課題に合わせたプログラミングを自立的に思考できるようになる
- 3) アルゴリズムについて学び、問題解決の方法が一通りではないことを学ぶ
- 4) プログラムとグラフィックス等とを結びつけた処理ができるようになる。

授業計画 Course Schedule

本講義では、オブジェクト指向型のプログラミング言語として、Ruby を用いる。Ruby は、日本発の代表的なプログラミング言語で、オープンソースとして、世界中で広く使われている。初歩から始め、課題の解決を通して、実践的に学ぶ。

- 1) テキスト記載のプログラムを編集・実行することを通してプログラミング言語に慣れる。
- 2) 指定された基礎課題を解決し、その結果を提出する。
- 3) 取り組む応用課題を決め、それを解決し、その結果とレポートを提出する。
- 4) 授業内で、提出されたレポートと作成したプログラムについて、個別に質疑応答を行う。。

成績評価の基準と方法 Grading System

成績評価は、授業回数の 7 割以上出席した者について、学習態度(出席状況を含む) (20%)、課題提出(60%)、レポートと質疑応答の状況(20%)に基づいて行う。それぞれの項目により到達目標の達成度を評価する。

成績評価は「A+」から「F」までの 11 段階評価とし、成績分布は「A+」及び「A」=5~20%、「A-」及び「B+」=20~40%、「B」及び「B-」=30~50%、「C+」及び「C」=10~20%を目安として成績評価する。なお「A+」の割合は、履修者の上位 5%以内を目安とする。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

情報社会における学問の基礎力として、プログラミングを通して課題を解決するための考え方について学ぶことを目的とする。プログラミング言語は、オブジェクト指向スクリプト言語である Ruby とする。

授業は大きく2つに分かれており、前半はプログラミングの基本を問う基礎課題に取り組む。後半は、提示したさまざまな応用課題の中から関心のあるものを選択して挑戦する。応用課題については、課題解決後に結果や考察等をまとめたレポートを提出する。さらに、プログラムとレポートの内容について、個別に質疑応答を行い、理解度等を確認する。

② 授業実施上の取組・工夫

主に以下の工夫を行っている

1. ウェブ会議システムを用いた個別学生対応の実施（レベル別）

初等中等教育段階でプログラミングが必修化されているが、学生のスキルや知識には幅がある。それを前提に、授業では教員3名によるレベル別の担当制を敷く。初回には、学生に Python（前期の「情報学Ⅰ」で学習済み）の基礎事項に関する設問に解答させるとともに、初級・初中級・上級のいずれのグループを希望するかを確認する。設問の正解率と本人の希望を踏まえ、学生を各グループに分ける。

授業は全体で進めるが、3週目からはウェブ会議システムによる学生への個別対応（約5分/人で予定を立て、対応時刻を事前提示）を、毎週行う（学生は2週に1回、教員に進捗状況等を直接報告することになる）。各週の授業は、短時間の全体説明を行った後は、学生個々に課題に取り組む。教員1名が教室で全体対応、残り2名が学生との上記個別対応を行い、教員の役割を巡回させ進める。基礎課題では、後述のプログラミング学習環境を使う。当該環境では、学生の手づき等を含む実行履歴を保持しており、それを基に効率的な個別の学生対応を行う。また、学生は担当と話す機会もあり質問しやすいと考えるが、当該学習環境上からも質問ができる。

2. 基礎課題における独自システムを利用した負荷低減化と協調的確認作業

基礎課題で使用する（2016年に独自開発した）学習環境では、教員の補助資料の提示、プログラムの編集・実行を一画面で行うことができる（図1）。

The screenshot displays a web-based programming environment. On the left, a code editor titled '編集画面' (Editing Screen) shows Ruby code for calculating the sum of an array. The code includes comments in Japanese. On the right, there are two panels. The top panel, titled '教員の補助資料' (Teacher's Auxiliary Materials), displays the same code with additional comments. The bottom panel, titled '実行結果' (Execution Results), shows the output of the program: '1 2 3 4 5 6 7 8 9 45' and a message '実行が完了しました。' (Execution completed).

```
1 n = 9
2 b = []
3 for i in 1..n
4   b[i] = i
5 end
6 #和の計算と要素の出力・和の出力
7 wa = 0 # 和をカウントする変数の初期化
8 for i in 1..n
9   wa = wa + b[i]
10  printf "%3d", b[i] # 配列b要素の出力
11 end
12 printf "%3d", wa # 配列b要素の出力ループの後に和を出力
13
```

page 47

基礎課題8ヒント
和の値を格納する変数を用いる
1次元配列の例
n = 9
b = []
for i in 1..n
 b[i] = i
end
#和の計算と要素の出力・和の出力
wa = 0 # 和をカウントする変数の初期化
for i in 1..n
 wa = wa + b[i]
 printf "%3d", b[i] # 配列b要素の出力
end
printf "%3d", wa # 配列b要素の出力ループの後に和を出力
基礎課題8は実行後に結果（和）が正しいか確認すること

実行結果

1 2 3 4 5 6 7 8 9 45

実行が完了しました。

図1 独自のプログラミング学習環境

基礎課題3は変数に関する設問です。単位時間（30年）当たり半減する計算を行うこととしました。皆さんはどのような変数を具体的に使い、また、どのようなイメージで、半減について考え、式を立てましたか（図のリンクで、どちらのイメージが近いですか）。この設問では、条件として、30年で半減ということしか与えていませんので、（参考の式は提示していますが）それをどのように立式するかは各自に任されています。図のリンク（別タブで開きます）

番号	日時	現在の人口: current_population 現象比率: reduction rate 年数: year 将来の人口: future_population	図の青い線のような減少（スムーズな指数の減少関数）
----	----	---	---------------------------

レビューのコメント

「変数が何を表しているのかが分かりやすく良いですね!」

図2 学生への問いかけと返答例ならびにその学生返答への他者コメントの例

また、いくつかの基礎課題は、単に解くだけではなく、関連事項を学生相互に確認させる取り組みを行う。①学生に問いを投げ、②返答一覧を学生全体に（匿名で）共有し、③それら返答にさらにコメントを付与させる。また、記述内容を踏まえ、教員が学生に解説を提示する。図2は学生への問いかけとコメントの例である。この例では、変数名の付け方や、「単位時間当たり半減」を表現する式と半減のイメージとの関係等について、他者の返答を通して考えることで、理解を深めることを目指す。なお、基礎課題では生成AIの利用は全面的に禁止している。

3. 小テストの実施

後半に当該学習環境を使った小テストを2回実施する（基礎課題テキストは閲覧可）。指示に応じたプログラムを作成するもので、別途提示している補助資料のヒントを見ながら行うことのできる基礎課題よりも難易度が高く、実施後に基礎事項を復習しなおす学生もいる。この小テストは実力の確認だけではなく、応用課題の取り組みへの基礎固めの意味もある。

4. 応用課題の取り組みと質疑応答

難易度等が異なる20以上の応用課題の中から興味のある課題を選択し、一からプログラムを作り、レポートを提出する。課題の完成度、難易度やレポートの内容を考慮して評価する。複数課題の提出は加点であり、多数取り組む学生もいる。レポートの内容を重視している。生成AIの使用も可とするが、使った場合にはプロンプト等の提示を求める。なお、基礎課題から応用課題までの取り組みを把握している担当者が、プログラムとレポート内容について、個別に質疑を行うため、応用課題の達成度等は公平に評価可能である。

③ その他

学生には自分の進捗で課題に取り組ませ、進捗の速い学生には応用課題への着手を早期に促す。一方、わからないことに起因する脱落防止対策として、上述の通り、取り組み状況の可視化ができる学習環境と個別対応の仕組みを取り入れた。TAのサポートにも感謝したい。

■学生の自由意見（良かったと思う点等）

- ・講義型ではなく、自分のペース、実力に合わせて柔軟に授業内容を選択できるところがよかった。
- ・プログラミングについて触れ合うことができる点がよかった。

思索と言語

「中国哲学と論理学」

文学研究院 近藤 浩之

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

中国古代の諸子百家の各種文献のうち、言語学・論理学に関わる文章を読んで理解する。

到達目標 Course Goals

中国古代思想史の流れと諸相を理解し、漢文の訓読を修得する。また、多様な考え方の存在を認め、その異なる点を尊重しながら、慎重に正確に理解する力を身につける。中国古代思想における論理的な文章の記述の特徴を理解し、様々な解釈の可能性とそれに対する吟味や評価の仕方について考え、自分の見解を他者に的確に説明する力を身につける。

授業計画 Course Schedule

- 1.『墨子』經上・經説上・經下・經説下・小取の各篇の読解と考察。
- 2.『公孫龍子』跡府篇・『莊子』齊物論篇の読解と考察。
- 3.『荀子』正論篇・正名篇の読解と考察。
4. 文献資料に対する理解と考察の成果を論文としてまとめる。

成績評価の基準と方法 Grading System

文献の読解における発表及び討論の内容(30%)、毎回の小レポート(40%)などによる絶対評価を行なう。また、論文指導を受けた成果として、論文集に収めるべく、各自が論文一篇を執筆し提出することになるが、その論文の内容(30%)も評価の対象とする。

■ 授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

本授業は、中国古代の諸子百家を主とする各種文献のうち言語哲学や論理学に関わる文章を読んで、漢文（古代漢語）という言語の構造と特徴を理解し、多様な考え方の存在を認め、異なる意見を尊重しながら、精確に文章を解釈し理解する力を身につけることを目的とする。また、自分で論文を執筆するために、文章表現とそれによる様々な解釈の可能性とそれに対する吟味や評価の仕方について考え、自分の見解を他者に的確に説明する力を養うことを目指す。

② 授業実施上の取組・工夫

動機付けの工夫には最も重きを置いた。初回の授業でガイダンスの一環として必ず日高敏隆「人は実物が見えるか？」（『波』2003-11）を読んでもらう。シャレーの中の本物のアリを見ていても、多くの小学生が丸い頭と楕円形の胴体、四本の肢というよくありがちな虫の絵

を描いてしまうことから、「人間は実物を見たからといって、おいそれとその実物が見えるものではない」という話について考察することで、我々は普段どれほど多くの思い込みや先入観・固定観念等に影響されて生きているかに気づく。漢文（古代漢語）や古文を見るときも同様である。知らず知らず現代的な常識（思い込みや先入観等）でもって古代の人々の気持ちや考え方を解釈し理解したつもりになっている。そういう誤解の可能性を意識し、古代の本当の感覚（ものの感じ方や考え方）を捉え、古代の人々の独特な論理にできるだけ近づき寄り添うように促す（動機付けをおこなう）。

以降は、我々が現代的な常識で解釈し理解しているかもしれない漢文や古文の事例（題材）を提示して、古代の感覚や論理を考察してもらい、またかえって今我々の現代的課題をも見直す手がかりに気づくようにする。古代の人々は中国も日本も同じ旧暦（太陰太陽暦）にもとづいて年月日時や季節を表現し漢詩や漢文を作る。旧暦の感覚を理解しないで、現代の感覚で新暦的な常識でもって漢詩や漢文を真に理解できるのか。例えば、陶淵明「雑詩」其二の「白日淪西阿、素月出東嶺」を踏まえたと言われる「菜の花や月は東に日は西に」の俳句に詠まれた月はどうのような月か（三日月か半月か満月か）また何日頃の情景か。太陽が西に沈む頃に東からのぼる月は満月で、旧暦なら必ず十五日頃の情景だと、古代なら誰でも知っている感覚である。

『莊子』秋水篇の考察では湯川秀樹「知魚楽」（『創造への飛躍』、講談社学術文庫）を読み、科学者のものの考え方に通じるという見解を知る。後、『皇朝史略』青砥藤綱、『莊子』斉物論篇、『墨子』小取篇、『算数書』など、主に中国古代の論理学や言語哲学に関する文献を取り上げながら授業を進めるが、必ず現代の感覚や常識ではおいそれとは理解できない題材を選ぶようにする。現代（日本語）と古代（古代漢語）の世界とのギャップから、常識を疑い、問うべき問題を見つけ出す創造的思考力を養い、それを各自の論文執筆へと繋げてゆくように促した。

本授業は論文指導科目でもある。まず（言語や論理を考えるための）＜参考図書＞の中から一冊を選んで読了しそれを参考にして、＜論文構想＞（題目・概要・目的）をレポートにまとめて提出してもらう。その二ヶ月後＜中間報告＞では、執筆中の論文原稿を持ち寄り、3人一組になって原稿を相互に読み評価し合う。学期末に提出される＜完成原稿＞を教員が論文集（PDF）に編集し受講生に配付した。学期中二回行う＜中間報告＞は学生参加型グループ討論であり、他者と論文を読み合うことは、大いに刺激になったようだ。

③ その他

本授業は、動機付けとよい題材選びとがすべてだったと言っても過言ではない。古代の人々の常識（旧暦など）に対する、現代人の意識と知識の希薄さが、漢文や古文の理解を大きく妨げていることを痛感する。旧暦には古代の人々の「時」に関する論理と知恵が詰まっている。今後はもっと授業で取り上げるべきだと思っている。

■学生の自由意見（良かったと思う点等）

- ・論文について他の人と交流したことが楽しかった。授業内で扱った題材が面白かった。
- ・論理の解説を細かくしてくださったおかげで、難しいものでもなんとか理解できました（同じ解説でも、繰り返し言ってもらえるとだんだん意味・内容がつかめてきます）。
- ・この講座では、毎回中国古典の抜粋を紹介していただきました。その文章がすばらしかったです。論文指導の過程で、ほかの学生と論文の回し読みをして発表する機会があり、楽しかったです。

体育学B 講義

教育学研究院 阿部 匡樹

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

本講義の内容は、2つのセクションに大別される。

【阿部担当】人間の知覚情報処理のメカニズムに触れ、我々の日常の行動に潜む不思議さの一端を科学的に理解する。

【崎田担当】スポーツや人間の身体について人文社会科学的側面からアプローチし、現代におけるスポーツのあり方を幅広く理解する。

到達目標 Course Goals

【阿部担当】

(1) ヒトの知覚—運動システムについての基礎的な知識を習得する。

(2) 我々の行動や判断の背景にあるメカニズムを理解する。

【崎田担当】

(1) スポーツの科学的・文化的価値に関する基礎的な知識を修得することができる。

(2) 多様なスポーツのあり方について、自己の見解を示すことができる。

授業計画 Course Schedule

1. ガイダンス

【阿部担当】

2: 予測と観測

3: 多感覚統合

4: 知覚と文化

5: 身体と感情

6: 他者の理解

7: 曖昧な意思決定

8: 筆記試験

【崎田担当】

9: スポーツと文化(1) 学問としてのスポーツ

10: スポーツと文化(2) スポーツにおける技術と戦術

11: スポーツと身体(1) 合理的な「からだ」の動かし方

12: スポーツと身体(2) 教育としてのスポーツ

13: スポーツと社会(1) オリンピックの在り方

14: スポーツと社会(2) スポーツにおける倫理

15: 筆記試験

* 2つのセクション順は入れ替わることがある。詳細は初回ガイダンスにて説明する。

成績評価の基準と方法 Grading System

成績評価は、ガイダンスを含め授業回数の7割(10回)以上出席し、かつ期末試験を受験した者を対象として行う。授業への参加態度 40%、試験(レポート、小テストを含む)60%の重み配分に基づいて、到達目標の達成度を判定し評価する。なお、A+は特別の場合のみとする。なお、本授業は、2名の担当教員で実施する関係上、成績方法の詳細は担当教員のガイダンスで説明する。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

体育学B(講義)は、教育学研究院(健康教育論講座・身体教育論講座)所属の教員(7名)が原則として担当しており、各学期3-4コマ開講されている。各授業の多くは専門分野・領域の異なる教員2名がペアとなって担当しており、その組み合わせも毎年異なるペアとなるよう配置されている。なお、この講義は教員免許状取得に必要な科目(教育職員免許法施行規則 66条の6)でもある。

体育学Bでは、1)身体に関わる個人や社会、歴史等の学問研究の成果に基づいた発展理論を理解すること、2)身体を通して能動的に人間と社会を分析・考察できるようになることを目指している。この目的を踏まえて、本授業は、崎田嘉寛先生(身体教育論講座)が担当する「スポーツと人間形成」と、阿部(身体教育論講座・講義責任者)が担当する「ヒトの知覚-運動システムや行動・意思決定のメカニズム」で授業が構成された。授業の目標と内容は、シラバスに記載の通りである。なお、以下では、阿部が担当した取組等についてのみ述べる。崎田先生の取組等については、R6エクセレント・ティーチャーズ報告書を参照されたい。

② 授業実施上の取組・工夫

「体育」というとスポーツ・健康維持等が頭に浮かぶと思われるが、本授業(阿部担当分)ではもっと根本的な問い-我々の「身体」という知覚-運動システムがいかに制御され、どのように(周囲の人間を含む)外部環境と相互作用しているのか-に着目し、これらの知見が我々の日常にどのように関わってくるのかを理解することを授業の目的とした。したがって、内容は体育・スポーツというよりは心理学・社会科学・神経科学を中心としたものであり、もっとひらたくいえば「脳科学」的な内容といえる。

本授業の受講生は後期にいたっては200名を超え、個々の受講生、もしくは受講生間のやり取りを促すことは困難であったが、a)可能な限り受講生の興味・関心を惹きつけ、かつb)受講生が積極的に授業に参加できるような仕組みを心掛けた。a)に関しては、脳内の情報処理過程を端的に体感できる錯視現象を数多く提示したり、心霊現象のような有名な現象、誰でも心当たりのあるような神経経済学の実験などを説明したりして、講義内容に可能な限り”実感”が伴うようにした。b)に関しては、錯視の見え方や実験結果の予想などに関してリアルタイムのアンケート集計を行い、全員が積極的に講義に参加できるように配慮した。本年度はこれまで用いていたGoogleFormに加えてSlidoを導入し、リアルタイム性を更に高めた。

講義内容の整理に関しては、授業後に毎回GoogleFormによるアンケートを提出してもらい、次週の授業の冒頭では10以上の質問・コメントを取り上げて解説を加えた。また、講義内容はトピックごとに「小まとめ」でいったん整理し、最後には多くても3つほどのTake homeメ

ッセージに凝縮させ、本日やった内容が記憶に残るよう心掛けた。テストに関しては事前に内容を詳細に説明し、受講者間で情報入手による差異が生じないように心掛けた。

■学生の自由意見（良かったと思う点等）

- ・とにかく話し合いが多く、1人で考えるより視野が広がって、多くの気づきを得られた。
- ・阿部先生の授業は自分の知らない錯覚のはなしがとて多くとても興味深かった。人間の脳の不思議を感じた。崎田先生の授業は話し合いが多く、自分とは全く違う意見を聞くことが面白かった。
- ・目の錯覚だったり、授業内で実験のようなものを取り入れてくれて興味深かった。ディスカッションする時間があるのがよかった。
- ・実際に体を動かして確認したり、その場で映像を見てクイズに答えたりすることで、授業内容をただ口頭で説明されるよりも理解しやすかった。
- ・指導者という新たな視点で体育をとらえることができた。

韓国語 I

メディア・コミュニケーション研究院 金 ソンミン

■シラバス

授業の目標 Course Objectives

韓国語の文字と発音をしっかりと覚え、基礎レベルで必要とされる文法や文型を着実に学習していきます。聞く・話す・読む・書くという4技能の練習を通して、コミュニケーションの手段としての韓国語を身につけましょう。韓国語に親しむことは、隣国である韓国の文化や社会への興味や関心をかきたててくれるはずです。初めて学ぶ外国語としての韓国語、そして韓国・朝鮮半島の世界へ皆さんをご案内します。

到達目標 Course Goals

発音、基本的な会話表現、基本的な文法事項を習得します。自己紹介や買い物、食事などの場面で、簡単な表現を用いてコミュニケーションできるようになることを目標とします。

授業計画 Course Schedule

授業は教科書にそって行い、1 学期には教科書の前半部を学習します。毎回の授業では、多様な練習を通じて、韓国語の発音、文法、語彙を習得し、聴解力、読解力、書く能力を体系的に身につけます。また、授業中に随時、韓国・朝鮮語圏の社会事情や文化についても紹介します。

成績評価の基準と方法 Grading System

評価は絶対評価とします。授業参加度(授業への取り組み・小テスト・課題提出・発表等を含む平常点)30%, 達成度を測る各種試験 70%(統一試験 40%, その他の試験 30%)を目安に評価します。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

韓国語 I では、ハングル、発音、基礎文法を学び、自己紹介、買い物、食事など、日常的な場面で簡単なコミュニケーションができることを目標とする。聞く・話す・読む・書くという4技能を扱うが、私が授業の中心に置くのは、言語を単に頭で覚えるのではなく、声と身体を通して「自分の言葉」にしていくことである。

② 授業実施上の取組・工夫

初めて学ぶ言語を人前で発音することは、学生にとって小さくない負担である。不安や恥ずかしさが先に立てば、知識があっても言葉は口から出てこない。そこで、正しさだけを先に求めず、誰もが安心して声を出せる雰囲気をつくる。教員の発音を全員で繰り返し、クラスメートと読み合い、短い表現を何度も使う。仲間と声を出し、互いの声を聞くことによって、一人で練習するだけでは得られない一体感が生まれる。外国語の教室を、間違いを避ける場所ではなく、ともに試し、ともに学ぶ場所にすることが重要である。

練習問題に取り組む時間には韓国の音楽を流し、教室の緊張をやわらげる。映像、音楽、

食文化、大学生活、若者言葉なども随時取り上げ、授業で学ぶ表現が、韓国社会のどのような場面で、誰によって、どのような感情を伴って使われるのかを紹介する。言葉は、文法規則と単語の集合ではなく、人びとの暮らし、関係、歴史、価値観のなかで意味をもつ。多様な文化的文脈の上で意味やニュアンスを理解し、実際の場面を想像しながら使うことで、韓国語を身体化し、自分の言葉として身につけることができると考える。

ハングルも、文字を一つずつ暗記させるのではなく、子音と母音を組み合わせる仕組みから説明する。発音では正解の音を示すだけでなく、口や舌をどのように動かせばその音が生まれるのかを確かめる。また、すでに慣れている日本語や英語との比較を通して、言語としての韓国語の特徴と魅力への理解を促す。聞く、まねる、読む、理解する、相手に伝えるという過程を繰り返し、毎回小さな達成を感じられるようにする。記号に見えた文字が読め、自分の名前を書き、一つの文を話せるようになる。その変化を学生自身が実感することが、学期を通して興味と学習意欲を保つ確かな動機になる。

教科書は授業の骨格であるが、順番に消化すること自体を目的にはしない。文法や語彙を説明した後、それを自己紹介や身近な会話へ置き換え、「この表現を使えば何ができるのか」を示す。全員での反復からクラスメートとの練習へと段階的に進み、自分の声で話せるように導く。成績評価では、試験による到達度に加えて、授業への取り組みを平常点 30%として評価する。発言回数だけでなく、声に出して読むこと、相手の発音を聞くこと、学んだ表現を使おうとする過程も評価の対象とする。

③ その他

授業アンケートでは、学生参加を促したという項目と授業全体の満足度について、回答者全員から肯定的な評価を得た。「声を出しやすい雰囲気だった」「実際に話して学ぶため記憶に残った」「韓国の文化や社会にも関心が広がった」といった感想も寄せられた。一方、復習資料や短い確認課題を求める意見もあった。今後は課題をいらずに増やすのではなく、授業で得た感覚を次回まで保ち、自分の到達度を短時間で確認できる仕組みを整えたい。

外国語の授業を楽しくすることは、学習の負荷をなくすことではない。適切な難しさのなかで得た小さな達成を仲間と共有することで、興味は持続する学習意欲へと変わる。文化的な文脈を知り、仲間と声を出し、小さな成長を重ねることによって、外国語は教科書のなかの知識から、他者と出会うための自分の言葉になる。

■学生の自由意見（良かったと思う点等）

- ・初回授業で、学生たちが声を出しやすいような雰囲気をつくっていたことがよかった。
- ・教科書の進行に縛られすぎず、受講者が日常で韓国語を使えるようになるように授業されていたと感じる点がよかった。
- ・初修外国語ということで難しいのかと不安な気持ちがあったのですが授業を通じてわかりやすく楽しい雰囲気で説明をいただけて韓国語が面白く勉強しようという気持ちになりました。毎授業少し早く終わらしてもらえるのうれしいです。時折その分の時間を韓国についての雑談を増やしていただいても興味深く聞けると思います。来学期も楽しみです。
- ・先生の日本語が本当にネイティブっぽいため聞きやすかった。授業ごとにステップアップしていくのを実感でき、モチベーションを高く保ってくれるような楽しい授業だった。ちゃんと自分の口で喋るような講義なのも良かった。韓国の常識や文化についても同時に教えてもらえ、より一層韓国に行ってみたいと思った。

フランス語演習

メディア・コミュニケーション研究院 LADREYT ALEXIS CLAUDE

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

Level 1、level 2、level 3 と文法、発音方法を続けて学習していきます。ですから、必ず順番に履修してください。外国語科目としてフランス語を選択している学生でも、選択していない学生でも履修できます。基本的にはフランス語を初めて学ぶ学生を対象としますが、既習者も、これまでフランス人の先生と学ぶ機会のなかった人も対象とします。フランス語を母語とする教師による演習ですので、ネイティブのフランス語に直に触れて、正しい発音を学び、耳と口の訓練を重点的に行いつつ、聴く・話す・読む・書くという四技能の基礎を身につけることを目指します。フランス語の全般的な基礎知識を習得し、日常会話に必要な実践力を身につけます。また、フランスの文化や社会的慣習についても学びます。

到達目標 Course Goals

正しい発音を身につけ、聞き取り能力、生きた会話力を習得して、きわめて日常的な状況で、ごく初歩的なコミュニケーションができるようになる能力を養うことを目指します。また、異文化能力、フランス語圏についても学びます。また、本授業はそれらの能力を用い、母語話者とフランス語で単純な会話を行うようになることを目的とします。フランス政府のレベルテストにおける DELF/DALF の A1.1 を目指します。

授業計画 Course Schedule

教師に渡された教材に沿って、挨拶、自己紹介、好きなものを言う、評価する、質問する、情報を求める、身体や心理について描写する、などの状況で必要な表現を学びます。文法事項としては、動詞の être と avoir、第 1 群規則動詞、冠詞、疑問文、否定文などを学びます。ペア練習、グループ練習などのさまざまな口頭練習、また読んだり書いたりする練習を行います。フランス語演習の行い方に関する詳細は最初の授業でのガイダンスで説明します。

成績評価の基準と方法 Grading System

演習形式の授業であるため、授業への積極的参加を重視し、授業参加度(出席率・ロールプレイへの参加・講義への取り組み・小テスト・課題提出・発表等を含む平常点)、達成度を測る筆記試験を目安に評価します。具体的には、授業の中であらためて指示します。また、第 10 週には短い口頭テストを行い、学期末までに課題を提出します。12 回以上出席することが評価の最低条件となります。成績評価方法については、第 1 回の初回、および第 14 回目の試験前の授業でより詳しく説明する予定です。

■ 授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

「フランス語演習」は、全学教育の必修科目として開講される、口頭練習を中心とした授業である。学部 1 年生だけでなく、修士課程・博士課程の学生も受講できる。初学者を対象とし、C 1 (CEFR の A 1.1 レベルに相当)、C 2 (同 A 1 レベル)、C 3 (同 A 2.1 レベ

ル) の3つのレベルに分かれている。

本授業では、①フランス語の発音の習得と、②フランス語特有のコミュニケーション・ストラテジーの理解という、2つの柱に重点を置く。①については、感覚運動的アプローチに基づき、フランス語の音声体系における調音メカニズムの習得を目指す。②については、日常生活の具体的なやりとりの場面で、フランス語母語話者が交わす会話を聞き取り、分析する。文法は必要最小限にとどめ、実践的な口頭練習にできる限り多くの時間を充てている。授業の進め方は、アクティブ・ラーニング、学習者を帰納的に導く指導、そして日本語・英語・フランス語間の対照的視点に基づいている。

本授業の目的は次の3点である。①発音および発話の組み立てにおいて、フランス語の確かな基礎を身につけること。②フランス語におけるやりとりのダイナミクスについての知識を養うこと。③学生が接する他の外国語の学習にも役立つ、言語学習に対する能動的かつ意識的なメタ分析的姿勢を育てること。フランス語と日本語の対照研究、フランス語の習得、日常会話の分析を専門とする言語学者として、学生がフランス語（あるいは他の外国語）を話すときに何が起きているのかをよりよく理解できるよう、私自身の研究内容の一部を折に触れてごく簡単に紹介することもある。授業では、説明は日本語で、口頭練習はフランス語で行っている。

② 授業実施上の取組・工夫

口頭練習に適した環境を整えるため、履修者数は1クラス25名までに制限されている。各レベルについては、学習内容を方向づける全体的な指針を設けたうえで、授業計画をあらかじめ作成している。C1は「フランス旅行やフランス人との初対面の場面で簡単なやりとりができること」、C2は「事実を描写し、意見・感情・考えを表現しながら簡単な会話ができること」、C3は「より練られた考えを表現し始め、将来の交換留学に備えること」である。C3レベルでは、受講生の多くが授業の目標レベルを大きく上回るフランス語運用能力を持つため、各自のニーズや目標に合わせて授業内容を調整している。また、フランス政府認定の DELF・DALF 試験官の資格を有しているため、希望に応じてこれらの試験の対策指導も行っている。

毎回の授業は同じ流れで進めている。①前回の授業内容に関する6分間の小テスト、②クラス全体での答え合わせ、③発音練習（発声器官の調音メカニズムを示すモデルを用いて説明することで、学習する発音への理解を深め、自宅でも調音運動を再現できるようにする）、④コミュニケーション・ストラテジーや語彙・文型に関するグループ練習（⑤の準備）、⑤フランス語母語話者同士の生のやりとりの聞き取り（内容理解の設問と、やりとりの仕組みについての踏み込んだ解説を伴う）。毎回の授業で、すべての学生に少なくとも1回は発言の機会を与えており、質問に対する回答率は90%に達している。私の説明は5分以内にとどめ、学生は授業時間の70%を個人またはグループでのフランス語の練習に充てている。グループ練習の間は各グループを巡回し、必要に応じて助言や修正を行う。

授業ごとにグループを組み替える教員もいるが、私は同じグループを維持している。その理由は、一つには中間口頭試験の準備がしやすくなるため、もう一つには、一緒に学ぶことに慣れた学生同士には信頼関係が生まれ、互いに助言や訂正をしたり、新しいことに挑戦したりしやすくなるためである。毎週パートナーが替わると、こうしたことは起こりにくくなる。宿題は、次の小テストに向けて復習する語彙シート1枚のみである。教科書は使用せず、教材はすべて自作し、毎年内容を充実させている。

評価については、授業内で達成すべき複数の目標を記載したポイントシートを使用している。毎回の授業で、求められた課題をきちんと遂行できた学生には、その場で印鑑を押す。

これにより、授業中の一つひとつの努力が評価され、学生は自身の進歩を具体的な形で確認できる。試験は2回実施する。第10回の授業では中間口頭試験を行い、2～4名のグループが順番に、3～5分間のフランス語による会話を発表する。第15回の授業では、主にコミュニケーション能力を測る活動からなる筆記試験（学期末試験）を実施する。その準備（授業内容の復習）は第14回の授業で行う。口頭試験および学期末試験の結果も、このポイントシート上で確認できる。このように、評価は学期を通じて継続的かつきめ細かく行われ、すべての技能が幅広く測定される。また、できるだけ多くのポイントを獲得しようとするのが、学生の学習意欲を高めることにもつながっている。

③ その他

本授業は必修科目でありながら、学生自身が選んだ科目ではないことから、副次的なものと思なされがちである。そのため、学生の学習意欲は、残念ながら必ずしも高いとは言えない。

【教員こそが学生のやる気を引き出す鍵となる！】

- ・授業にテンポを持たせ、外国語を学ぶことは楽しいのだと実感させる。
- ・母語話者でさえ間違えることを示し、誤りは悪いものではなく、むしろ学習を強力に後押しする原動力であると伝え、学生を安心させる。
- ・学生を受け身の姿勢にさせない：簡単な質問を投げかけながら授業に巻き込み、自分なりのやり方で貢献しているのだと感じてもらおう。
- ・学生に寄り添う姿勢を保つ：学生のニーズやつまずきを理解する。

■学生の自由意見（良かったと思う点等）

- ・文字の読み方についてフランス1より詳しく知れること 評価基準がはっきりと示されていることがよかった。
- ・記述だけでなく、会話による試験が設けられている点がよかった。
- ・フランス語初心者でも、授業についていくことができたこと。あと、授業シートで自分がどれくらいの成績をとれているのかが分かったため、目標を立てて勉強しやすかった点がよかった。
- ・大学のほとんどの授業が相対評価であるのに対し、この授業は絶対評価であるため、がんばったらちゃんといい成績がとれるのも良いところであったと思います。

化学Ⅱ

工学研究院 久保田 浩司

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

化学は、多種多様な物質の性質・機能や生命現象の仕組みを系統的に理解するための学問である。化学Ⅱでは、生体関連物質や機能性物質の基本となる有機化合物について、構造、化学的性質、反応性を考える。様々な有機化合物の物理的・化学的性質を、官能基と分子構造によって整理し、それらの相互変換に用いられる化学反応の基礎とそれを支配する要因について学ぶ。

到達目標 Course Goals

1. 有機化合物の結合、構造を電子と混成軌道の概念から理解する。
2. 有機化合物の命名法と立体構造を理解する。
3. 官能基の分類を学び、物理的・化学的性質や反応との関係を理解する。
4. 有機化合物の基本的反応様式を学び、その機構を電子の観点から論理的に理解する。

授業計画 Course Schedule

1. 有機化合物のなりたち(構造式、共有結合、ルイス構造、極性、共鳴、形式電荷)
2. 官能基の分類とIUPAC命名法
3. 混成軌道、異性体と立体構造(アルカン、アルケン、アルキン、配座構造、立体異性)
4. 有機化合物と分子間力(物理的性質 高分子・分子集合体の構造)
5. 置換基の誘起・共鳴効果(電子求引・供与性、酸性度)
6. 有機化合物の性質と反応(求電子付加、求電子置換、求核付加、求核置換)

成績評価の基準と方法 Grading System

中間試験(50%)および期末試験(50%)の結果を踏まえて、総合的に評価する。成績は、「A+」及び「A」=5~20%、「A-」及び「B+」=20~40%、「B」及び「B-」=30~50%、「C+」及び「C」=10~20%を目安として相対評価を行う。

■ 授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

1.1 目的

本授業は、有機化学の基礎概念および反応性の理解を通じて、物質の構造・性質・機能を分子レベルで捉える力を養うことを目的としている。

1.2 内容

有機化学は、多種多様な物質や生命現象を体系的に理解するための基盤となる学問であると同時に、分子を自在に設計・変換する「究極のものづくり」を担う創造性に富んだ学問分野である。本授業では、知識の習得に加え、有機化学が現代の科学技術や産業を支える重要な基盤学問であることを理解してもらうことにも重点を置いた。

② 授業実施上の取組・工夫

- ・受講生の多くは学部1年生であり、将来的に有機化学を専門としない学生も少なくない。そのため、第1回講義では有機化学の社会的意義や学術的重要性について十分な時間を割いて説明し、「有機化学は社会や産業を支える重要な学問であること」「有機化学の基礎知識は理系学生として幅広い分野で役立つこと」を理解してもらうよう努めた。また、学生の興味を引き出すため、印象に残る具体例や表現を適宜取り入れながら講義を進めた。
- ・私自身が有機化学を楽しみながら研究・教育に取り組んでいることが伝わるよう意識し、学問の魅力を積極的に発信した。こうした姿勢を維持するためには多くのエネルギーを要するが、学生の学習意欲を引き出すうえで不可欠であると考え、一貫して実践してきた。
- ・講義はスライドを用いて実施したが、学生が受け身にならないよう、重要事項を穴埋め形式で整理しながら進捗した。記入量についても過不足のないよう調整し、解説そのものに集中できるよう配慮した。その結果、授業中の集中度は高く、教壇から見ている限り、居眠りをしている学生はほとんど見受けられなかった。
- ・使用した講義スライドは、市販教材の図表をそのまま用いるのではなく、授業内容に合わせてすべて独自に作成した。図や模式図についても、学生が視覚的に理解しやすいよう簡潔かつ分かりやすい表現を心掛け、授業後に見返した際にも学習に活用できる教材となるよう工夫した。
- ・学習内容の定着を図るため、毎回の授業後に小テストを実施した。提出された答案にはすべて目を通し、学生一人ひとりの理解度やつまづいているポイントを把握するよう努めた。
- ・授業終了後には多くの学生が質問に訪れたため、十分に理解・納得できるまで丁寧に対応した。説明が不十分であったと感じた内容については、その旨を率直に認めたとうえで、次回講義において全体への補足説明を行った。
- ・90分の授業は学生の集中力を維持することが容易ではないため、毎回講義の途中に5分程度の休憩時間を設けた。適度に休息を挟むことで、後半の講義にも集中して取り組めるよう配慮した。また、学部1年生が将来の進路や研究分野について考える機会を提供するため、休憩時には自身の学生時代や研究活動、キャリア形成に関する経験談を紹介した。研究者としての実体験や進路選択に関する考え方を共有することで、学生が自身の将来像を考えるきっかけとなるよう努めた。
- ・定期試験については、公平性の確保を重視し、問題用紙および答案用紙を回収することで過去問の流出を防いだ。また、出題内容は授業で扱った範囲を逸脱しないよう慎重に設計し、授業内容を十分に理解し学習した学生が適切に評価される試験となるよう努めた。

③ その他

授業時間内外を問わず質問を歓迎する姿勢を示し、メール等による問い合わせについても速やかに返信することで、学生が安心して学習に取り組める環境づくりに努めた。

■学生の自由意見（良かったと思う点等）

- ・先生の話は非常に分かりやすく、興味を持って聞くことができた。また、今後の大学において重要なことについてもお話していただき自らの糧となった。
- ・毎回の授業できちんと内容が理解できるようになっているところ。詰め込みすぎではない感じがいいと思う。また、授業以外の研究者っぽい話を聞いたのも良かったと思う。
- ・先生の熱意がすごくて、有機化学っておもしろいんだなと思うことができた。

- ・授業のスライドは非常に要点がよくまとめられており、どこを勉強すればよいのかがわかりやすく復習もしやすかった。
- ・この授業のおかげで化学が好きになりました。